
目が覚めると隣で同僚が寝てました

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目が覚めると隣で同僚が寝てました

【Nコード】

N3558T

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

王女リリアーナに恋していた侍従アストの身に降りかかった災難の話。恋するテレサより前の話です。そちらから読んだ方がわかりやすいです。前後編。

前編

爽やかな朝。

アストは目を覚ましてしばらくぼんやりしたあと、くしゃみして自分が裸だということに気づいた。

疑問に思いつつ何気なく隣を見たら、同僚の侍女が寝ていてぶつたまげた。

「・・・え、テレサ？なんでテレサが？ここ、俺の部屋、だよな。うん。まだ寝てるのか俺。いや夢だとしてもこいつとベッドインなんてごめんなんですけど。・・・なんでこうなったー！ー！！」

「うるさい」

「うお！」

慌てふためくと、起きたらしい侍女にベッドから蹴り出された。転げ落ちた先が、脱ぎ捨てたような女性服の上で啞然とする。

「て、テレサさーん？」

アストがとにかく何があったか聞こうと声をかければ、テレサは頭の上までシーツをひつかぶっていた。

「ちょ、おいテレサ。待て。なんでまた寝る。この状況で寝るな。寝るなら何があったか俺に説明してからにしてくれ！」

下手に近づくとまた蹴られそうだったので床から抗議する。

テレサからの返事はなく、すーと穏やかな寝息だけが聞こえた。

アストはテレサを起こすのを諦めた。

アストが視線を下にやると、ズボンはちゃんとはいているとわかった。

床を見渡しても女性の下着らしきものは見当たらず、とりあえず安心する。

ベッドの中という可能性は放棄だ。

アストは服を着ながら、まず昨日の出来事を思い出そうとした。

昨日は、美貌の王女リリアンナと異国の王の婚姻が確定した日だった。

それはリリアンナの兄殿下の侍従を務めるアストの長い片思いの終わりも示していた。

国中の男達が嘆いて酒に溺れているのではないかという夜に、アストも例にもれず酒場に繰り出した。

同じ気持ちを共有できるであろう、リリアンナ付きの侍女テレサと共に。

二人ともリリアンナへの恋心のため、随分と嫌いあっていたが、今回のことで失恋が確定したのはどちらも同じだ。

リリアンナに恋する同士として同僚として今日ぐらゐは酒に酔って彼女への愛を語り慰め合おうではないか、と意気投合してしまったのだ。

アストはテレサとかなり夜中まで酒場で飲んでいた気がする。確か、たった二人で四人掛けのテーブルを酒で占領していた。

「うう、リリアンナさま。テレサがテレサがおりますのに、どうして結婚なんか・・・！ううう、王め、許すまじ！！」

「わかる、わかるぜ許せないよな。なんでよりによつてリリアンナ様が側室なんかに。リリアンナ様は側室におさまる方じゃねえよ。どんな偉い奴の奥さんでももつたいたい方だつてのによー」

「お前がリリアンナさまって呼ぶなーあ！でも今日は許す！」

「なんでお前の許可が必要なんだよー。でも許してくれてありがとうな！いつもなら問答無用で蹴り入れてくるもんな！」

「寛大なテレサに感謝しろー。よし、今日は朝まで飲むぞアスト！」
「言われなくてもなテレサ！」

とかなんとか頭のゆるい、正に酔っ払いの会話をしていたが、内容はほぼリリアンナだった。

そして同じ酒場にいた他の同僚が話しかけにきたのも覚えている。

「あれ、お前ら珍しいな。一緒に飲んでんのか？ああ、王女様の話な、俺も聞いたぜ悲しいよな。あの美貌が二度と見られないんだもんな」

「テレサはーリリアンナ様について行くんですー美貌はいつでも見られるんですー。悲しいのは結婚しちゃうことです！うわあんテレサのリリアンナ様があー！」

「誰がお前のだ！でもそうだなーお前は一緒に行くんだよなー。ちくしょう俺も行きたいなー」

「ふふーん、テレサは女の子だから一緒に行けるんです。うらやましいか、バカアスト。行くのは後宮だからアストは無理だーはははは」

「くそっ、うるさいぞバカテレサめ！ああ俺いつそ女になろうかな

」

「あ、似合いそー。ふふふ、テレサのリボンを贈呈してあげます。きやつかわいい！アストのくせに」

「本当か！？よしこれで俺もリリアンナ様と後宮に！」

「・・・お前ら、もう飲むの止めとけ」

そして彼が、帰るようすすめて、というか懇願してきたのも思い出した。

だが、肝心のその酒場から出た記憶がアストにはなかった。

酒場で酔って、テレサとリリアンナ話が白熱して、目が覚めて、今だ。

「やっぱり何も覚えてねえ・・・！」

アストは頭をかかえた。

手がどうやらずっとつけてたらしいリボンに当たる。

「・・・・・・・・」

なんともいえない気持ちで外した。

結局、脱力したアストはテレサが起きるまで待つことにした。
記憶がない以上、真相はテレサのみぞ知るからである。

適当に朝飯を作っていると、匂いにつられたのか、ベッドでもぞもぞとテレサが動き出す気配がした。

アストはおたま片手に振り向く。

「てめーやつと起き、って服を着ろー！！！」

上にシャツ一枚、下は下着だけで起き出したテレサに、アストはたんだおいた昨日の彼女の服を投げる。

だが、テレサは面倒くさそうにシーツに体をくるむだけにとどまった。

アストの額に青筋が浮かぶ。

「なんだその格好は」

「昨日の服なんて嫌ですよ。汗臭いし。酒臭いし。シーツの方がマシです。それ、朝ご飯ですか？食べます。あと水もくれませんか？」
「本当に自由だなお前は！」

アストは不本意ながらも水をわたす。
ありがとうございます、とテレサは水を飲み干し、勝手にイスに座った。

「それで、この状況の説明でしたっけ？朝ご飯の後でもいいですか？いいですね。私、お腹減ってるんです」

「・・・食い終わったら話せよ」

反論する気もおきなくなつたアストはさつさと軽い朝飯をテーブルに並べた。

元々、二人分を用意していたが、こうも当たり前に要求されると何も言えなくもなる。

二人揃つて黙々と朝飯を食べ終え、水を飲み一服したあと、テレサが口を開いた。

「昨日、というかすでに今日でしたが、簡単な話ですよ。私が酔いつぶれたあなたを酒場からここへ運んだだけです」

「そうだったのか、悪いな。助かった。・・・でもなんでお前も一緒に寝てるんだ。あとお前俺の家知つてたのか？」

「私はあなたを運んだあと、眠気に負けて寝ました。服は自分で脱ぎましたのであしからず。家はあなたが自己申告したんですよ。私の背中で寝言のようにぶつぶつと右、左、そこまっすぐなど。鍵も渡してきましたよ。覚えてないんですか」

「本当にすみませんでした」

前半は納得しがたかったが、後半が申し訳なさすぎて、頭を下げる。

テレサは満足そうにふんぞり返った。

アストは軽くいらつときた。

「私の今日の仕事は午後からなので、まだ時間があります。シャワー使わせてもらいますよ。服も貸して下さい。家に戻るの面倒くさいので、ここから城に行きます」

「もう好きにして下さい・・・」

アストはいろいろ諦めた。

恨むなら、テレサより早く酔いつぶれてしまった自分だ。

しかし、この後に城で起きる騒動を考えると、アストは決して諦めてはいけなかったのだと後悔するはめになる。

「アスト。このバスタオル使ってもいいですか？服は・・・」

「待て待て待て！！俺が出しておく。だから勝手に人のタンスをあさるな！！」

「予想以上の反応・・・もしやエロ本でも隠して？全く男という生き物は。リリアンナ様にも報告しときませんと」

「や、め、ろ！違うからな！間違えたことをリリアンナ様に言うなよ！！」

「勝手に私のリリアンナ様の名前を呼ばないで下さい！」

脛に蹴りを入れられて、悶絶する。

鼻歌混じりにシャワーへ向かったテレサを見ながら、アストは痛み
に涙をこらえた。

前編（後書き）

思いつくと止まらなくなったのでフィレオの話より先に投稿してしまいました。

ごめんなさい！

後編は城になります。

リリアンナと兄殿下が登場。

後編

テレサと同じく今日は午後出勤であったアストは、二人で城に行った。

そして、城における噂話の伝わる早さに愕然とした。

確かに酒場では大量の同僚と顔を合わせていたのだから当たり前といえは当たり前なのだが。

問題は噂話の内容だった。

城で一番に顔を合わせたおしゃべり好きの侍女が言うに。

「聞きましたよ、アスト様。酒に酔ったテレサ様を持ち帰って手込めにしたんですって？正直、あのアスト様が、あのテレサ様を？と思ってたんですが、テレサ様のその格好・・・いえ、いいんです。何も言わないで下さい。わかってますから。今日はアスト様に憧れた女の子達が泣くことになるんですね。大丈夫です、ちゃんと伝えておきますから！あと、王女様がお二人に城に来たらすぐに素早く何処にも寄らず殿下の執務室に来るように、とおっしゃられていましたよ。では私は仕事に戻りますので、お幸せに！」

「待てー！ー！！！」

アストは心から叫んだが、自己完結した侍女の耳には届かなかった。

「リリアンナ様がテレサをお呼びに・・・！？こうしちゃいられません、すぐに行きますリリアンナ様！」

テレサはテレサで侍女の話を一部しか聞いておらず、リリアンナの元へ走り出す。

「待て待て待て、お前も待て！その格好は駄目だ。着替えてから行

け。確かに昨日酔ってた女が次の日に男物で出勤してきたら誤解されるのは当たり前だ。気づかなかった俺が悪かった。謝るから着替えてくれ!!」

「馬鹿ですかアストは。リリアンナ様はすぐに素早くどこにも寄りずとの仰せなのですよ!着替えている暇はありません。早急に参りませんと!」

「それ絶対に怒ってるだろ!?誤解のにおいがプンプンするわ!俺はリリ、王女様に誤解されたくないんだけど!」

「誤解?何をおかしなことを。今の状況は純然たる事実しかありません。酒に酔って一晩共にして服かりて。・・・どこに誤解が?」

「わかつちやいたが、あらためて言われると一つの結末にしかたどり着かないな、ちくしょう!」

もちろんアストがテレサと一線超えたという恐ろしい結末だ。

迷うことなく進むテレサの後ろを走りながら、アストは何かひっかかることに気付いた。

「殿下の執務室・・・?」

リリアンナの呼び出し先が、その兄殿下のいる場所ということにアストは顔を青ざめさせた。

数分後。

執務室で、床に正座するアストとテレサ。

二人の前には、麗しのリリアンナが腕を組み仁王立ちしている。その柳眉は不機嫌によせられ、薔薇の唇は下向きに歪んでいたが、美人はどんな顔をしていても美しい。

テレサはリリアンナを見て頬を染めた。

「ああ！理由はわかりませんが、お怒りになっっているリリアンナ様も可憐です……。もっと睨んでください！」

「静かになさいテレサ」

「はい静かにしますリリアンナ様！」

アストはテレサの意見におおむね賛成だったが、口に出す勇氣はない。

この執務室には三人とあと一人がいた。

アストとテレサとリリアンナと、そしてリリアンナの兄殿下。

殿下はリリアンナの後ろの机で書類を処理しつつ、時折こちらに視線を送っていた。

アストは正直な話、リリアンナよりこの今何を考えているかいまいちわからない殿下の方が怖い。

「で、どういふことかしら・・・？」

リリアンナの鈴の鳴るような声が、ゆっくり問い詰めるように響く。

睨む先がどちらかと言うとアストに集中しているのは気のせいだと思いたい。

無理な話だったが。

アストは答えようとしたテレサを制し、口を開いた。

「今日の朝、テレサが俺の家に訪れて服を強奪していきました」

嘘だ。まごうことなき。

だが、リリアンナに誤解されない為にはこうするしかない。

な？とアストがテレサを促す。

「そんな感じです」

なんとかテレサも口を合わせてくれたことに、アストはほっとする。

リリアンナは驚いたように言った。

「それだけなの？」

「朝ご飯もいただきました」

「・・・作りました」

てんめええ余計なことをいうなあああ！と心の中で叫ぶアスト。
自分も余計な言葉を付け加えたとは気付いていない。

執務中の殿下の手が止まったのが見えて、アストは戦慄する。

殿下はいぶかしげなりリアンナを呼んで、彼女にアストとテレサには聞こえない声で何かを伝えた。

リリアンナは少し、戸惑ったあと、意を決したようにこちらに言った。

「テレサ、本当のことを話さない。正直に言ったら、頬にキスぐらいはしてあげましょう」

テレサは優等生のごとく片手を挙げた。

「はいリリアンナ様！私は昨日、酔いつぶれたアストをアストの家に運んで、ついでに一泊しました！自分の家へ戻るのが面倒だったので服もかりました！正直に言ったのでキスください！」

「このお馬鹿！！」

リリアンナは思わずといった様子でテレサの頭をはたく。

「リリアンナ様！これはキスじゃありません！でもありがとうございます！」

「馬鹿！！どうしてそう簡単に酔った男の家に泊まるの！？いったい何歳なのよ！！」

「十八になりますリリアンナ様！」

「知ってるわよ！！！」

アストはその場で崩れ落ちていた。

つられた気持ちは痛いほどわかるので、文句も言えない。

「卑怯ですよ殿下・・・！」

確実にリリアンナに入れ知恵していた殿下にひっそりと呟く。

殿下は書類片手ににっこりと微笑んだ。

だが目が笑ってない。

アストの背中に寒気がはしる。

「アスト！！テレサに手は出してないんでしょーね！！」

顔を真っ赤にしてリリアンナがアストに怒鳴った。

普段はテレサに対して辛辣なリリアンナだが、流石にこんな場合だと全面的にテレサの味方らしい。

アストは首を勢いよく横に振った。

「してません！」

「テレサの心配を・・・！リリアンナ様お優しい！大丈夫ですよ、私はアストくらいなら片手で撃退できます！」

肩をぐるぐる回すテレサ。

テレサが近衛に混ざって鍛錬するのが日課であることを知っているため、リリアンナは、まあ確かに・・・とアストに失礼な納得をする。

事態が収束したのを見計らってか殿下が口を開いた。

「まあ、二人に何もなかったというなら、私もリリアンナも文句はないよ。呼び出したのは妙な噂が飛び交っていたからだしね。でも二人とも軽率すぎたのも確かだから反省しなさい」

優しげに微笑む。

やはり目は笑ってないのだが、はい、とおとなしく返事するテレサは気付いてないようだ。

「じゃあ二人には仕事に戻ってもらおう。リリアンナも婚姻の準備をすすめなさい」

リリアンナが一礼して部屋から出て行く。

テレサもついていこうとしたが殿下に引き止められた。

「テレサ、少し待って。今から着替えに行くんだろう？ ついでに伝言を頼みたいから残って。アスト、ここの書類が処理済みだから、いつも通りに」

アストは暗に出てけ、と言われてるのを感じ取り、心の中ですまんテレサと念じながら書類を持って退室した。

その後、執務室で何があったかアストは知らない。

だが一カ月ほどアストの仕事が意図的に倍増され、ひいひい言うはめになったことは確かだった。

後編（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました！

あとでちょっとテレサ側で夜の話と執務室の話があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3558t/>

目が覚めると隣で同僚が寝てました

2011年5月21日04時46分発行